

令和6年度 第1回  
寒河江市総合教育会議  
会 議 録

令和6年8月23日 開会

令和6年8月23日(金) 令和6年度 第1回寒河江市総合教育会議

○ 会議出席者

寒河江市長	佐藤洋樹		
寒河江市教育長	佐藤志津男		
寒河江市教育委員	鈴木淳一	鈴木多鶴子	
	大沼賀世	大沼尚史	

○ 事務局職員の職氏名

総務課長	猪倉秀行	学校教育課長	今野育男
指導推進室長	石山勝巳	生涯学習課長	安彦絵美
スポーツ振興課長	笹原泰治	総務課課長補佐	菊地小百合
学校教育課長補佐	秋場昭吾	生涯学習課長補佐	村上千尋
スポーツ振興課長補佐	兼子亘		

○ 日程

令和6年度 第1回総合教育会議日程  
令和6年8月23日(金)

午後2時50分開議  
議会第2・第3・第4会議室

1 開会

2 あいさつ

3 協議

4 その他

5 閉会

## 1 開 会 午後2時50分

### 2 あいさつ (佐藤洋樹市長)

皆さん、暑い中お集まりいただきありがとうございます。8月23日ということで、8月も下旬に差し掛かっておりますが、朝晩はいくらか涼しくなりました。稲穂もだいぶ首を垂れてきて、秋の気配を少し感じるわけでありますけれども、今日は令和6年度になって初めての寒河江市総合教育会議となります。この総合教育会議は平成27年度からスタートしたのですが、教育委員会の教育委員長制度の改正があって、総合教育会議が設置され年に2回会議を行い、皆さんと意見交換をさせていただいて、それぞれの行政運営に資するということではありますが、今回は不登校対策をテーマとするものです。

私の方で少し調べてみましたが、総合教育会議で不登校をテーマとしたのは初めてだと認識しております。大きな課題の一つとなっていると推測いたしますが、限られた時間の中ではありますけれども、皆さんと意見交換をして課題に対する認識を深めていければと考えておりますので、忌憚のないご意見を頂戴していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

### 3 協 議 (座長：佐藤洋樹市長)

#### (1) 不登校対策の現状と課題について

##### ○佐藤洋樹市長：

それでは早速協議に入りたいと思っております。(1)不登校対策の現状と課題について、まず石山勝巳指導推進室長の方から説明をお願いします。

##### ○石山勝巳指導推進室長：

資料2ページをご覧ください。全国的な不登校の現状として、資料の中の折れ線グラフにありますように、平成25年度からは不登校児童生徒が増加傾向にあります。ちなみに、平成25年度ははじめ防止対策推進法が施行された年になります。

その後、平成30年度には新しい学習指導要領が公布されておまして、令和に入って「令和の日本型学校教育」といわれる、個別最適な学びと協働的な学びを推進するような時代になってきています。資料下段は、令和4年の学年別不登校人数なのですが、平成の時に比べて、小学校6年生と中学校1年生の間にはかなりの差がありました。この差がなだらかになってきております。資料3ページにありますように、中学校は平成の時代と比べて不登校の人数が2倍に増えているのですが、小学校では4倍ほど増えています。

3ページの下段ですが、教員以外でどこか外部の機関で相談ができていた児童生徒が6割です。逆に言うと、残りの4割が、どこの機関ともつながっていないという現状です。

資料4ページをご覧ください。不登校児童生徒たちとその保護者が安心できる居場所やつながることができる場所の情報提供というのも、強く求められていることがわかります。4ページ下段は、学校側、つまり先生方に聞いた不登校の要因としては、「無気力や不安が大きい」ことが挙げられているのに対し、5ページにありますように子どもたちに要因を聞くと、「先生とのこと」

がきっかけで学校に行きづらくなったことが多く挙げられております。

このように、教員側と子ども側で不登校要因の大きなズレが感じられます。資料6ページ上段は別の調査物にはなりますが、もう少し具体的な内容で前述のズレがわかります。下段は寒河江市の現状で、令和5年度までの年間30日以上欠席した子たちのデータになっており、青色が小学生でオレンジ色が中学生になります。資料7ページの下段は、寒河江市で設置しております寒陵スクールに在籍している子どもたちの現状についてですが、平成と令和で前述と同じようなグラフの伸びとなっております。

資料8ページをご覧ください。中点の二つ目ですが、現在寒陵スクールに在籍している児童生徒についてです。昨年度は18名おりましたが、今年度は8月現在で中学生は11名となっております。別室登校の教育相談員を各学校に配置している成果がみられると分析しているところです。8ページ下段についてですが、市内在住の子たちでフリースクールに小学生1人、フリースペースに小学生1人通っています。

寒河江市の現在の不登校児童生徒関係についての取り組みについてご説明いたします。資料9ページになります。まず、(1)未然に防ぐため、と考えておりました、研修会の実施や会議の開催、スクールカウンセラーの配置等を実施しております。それから、今年度初めて取り組んだこととなりますが、教育相談員を1名ずつ各中学校に別室指導員として配置しております。非常勤ですが1日6時間の週5日勤務でして、生徒たちの状況をしっかり見取って、その状況に合った活動を仕組んでいくことができる状況となっております。

それから、資料10ページの寒陵スクールの役割についても、設置当初は適応指導教室という名称で、児童生徒が学校に通えるようにしていきたいというのが大きな役割だったのですが、今の状況に合った指導として、学校とのつながりを保ちながらも社会的自立を意識した指導が寒陵スクールで行われるようになっております。10ページ下段は、指導要録上の出席扱いについてです。寒陵スクールに通級した児童生徒について、または、民間施設に通級した児童生徒については、資料11ページのメモにありますように、ガイドラインを策定し、出席扱いにするばあいとなる内容となっております。11ページ下段ですが、不登校児童生徒をもつ保護者の会として、「たんぼぼの会」というものがございます。保護者同士が直接会って話すことができる場も作っているところです。

不登校のこれからと課題解決ということで、資料12ページをご覧ください。まず、生徒指導の見方として、学校において「支える生徒指導」への転換を図っていきたいということで、平成29年には全国的に教育機会確保法が制定されまして、令和5年には「COCOLOプラン」も出されております。これは、「チーム学校」として子どもたちの小さなSOSを見逃さないで支援していきたいというもので、これからの学校の意識転換として、先ほどのアンケートもふまえて、資料13ページ下段にまとめました。

一つ目は、安心安全な居場所となるための魅力ある学校づくりを、ことに特別活動の充実を図りながら、学級活動の意義を再度確かめて、子どもたちの主体性を育て自己肯定感を高めていく場にしていくことに力を入れたいと考えております。

二つ目は、各教科全てにおいてですが授業作りについて、揃えることにこだわらず個々の多様性を認め、「こうあるべきだ」という大人の先入観は捨て、子どもたちの姿をしっかりと把握し、わかる授業を作っていきたいと考えております。学習面でのつまづきは、不登校の要因の一つであ

ると考えています。先ほどのアンケートで、子どもたちが挙げていた不登校の要因の中の「先生のこと」では、授業の内容を指している場合もあるのではと考えております。

資料1 4ページをご覧ください。誰にとっても居心地の良い教室になるために、ということで前述の内容をもう少し具体的に書いております。それから、寒陵スクールについても、資料本文中赤い文字にあるような、これまでの適応指導教室から教育支援センターとしての寒陵スクールとなるよう、新たな視点で取り組んでいきたいと考えているところです。(5) 相談しやすい環境作りも進めていかなければと思っております。全国のアンケートにあるように、「相談したけれども助けにならなかった」というところは、しっかりと受け止めて、例えば教育委員会であればつなぐ役割も担っていかなければと思っております。(6) 特別支援教育についても、不登校の要因の一つと指摘されております発達障がいとの関わりについては、特別支援教育力を身につけていく必要があると考えています。

最後に、資料1 6ページをご覧ください。まずは、子どもたちの心をしっかりと掴むことができるように教員自身もゆとりがないと、正しく子どもたちの心を掴むことができない場合がありますので、ゆとり創造については今後も推進していきたいと考えております。資料の説明は以上です。

○佐藤洋樹市長：

はい。それでは、協議を進めていきたいと思いますが、ただいまの説明で、不登校対策の現状と寒河江市の現状や取り組み状況、最後に不登校の課題解決についてありました。最初に不登校対策の現状と寒河江市の現状や取り組み状況については、資料でいうと1と2になりますが、その辺りについて皆さんから意見をいただければと思います。それから、協議2回目でも不登校のこれからや課題解決についても意見をいただければと思います。

○鈴木多鶴子委員：

すみません、協議の前に質問よろしいでしょうか。

○佐藤洋樹市長：

どうぞ。

○鈴木多鶴子委員：

詳しい資料ありがとうございました。それで、8ページの上段で令和5年度の寒陵スクール在籍生徒の卒業後の進路状況を見ているのですが、高校入学後通えているのかどうか、あるいは高校を辞めているとか何か進路状況について教えていただきたいです。

○石山勝巳指導推進室長：

令和5年度に卒業し、寒陵スクールに通級していた生徒たちについて、高校を辞めてしまったということはありません。その子に合った学び方をしていると推測しています。寒陵スクールに通っていなかった生徒の中で高校に通えなくなったという生徒はおります。まずは、生徒自身が進路選択した学校で、それぞれ頑張っているところです。

○鈴木多鶴子委員：

ありがとうございます。令和5年度より前の状況はわかりますか。

○石山勝巳指導推進室長：

寒陵スクールに在籍していた子たちが、令和5年度より前はどうかだったかというのは分かりません。

○鈴木多鶴子委員：

今後そういった、中学校を卒業して高校生の段階での子どもたちの様子等も、引き続き見ていくことが必要かなと思います。ありがとうございます。

○佐藤洋樹市長：

他に質問等ある方おりますか。ないようですので、鈴木淳一委員からご意見の方をお願いいたします。

○鈴木淳一委員：

いろいろと資料ありがとうございました。それでは、不登校の現状と取り組みということについて、少しお話させていただきます。

今回の配付資料を見る前に、不登校の原因については、いじめが大きく関係しているのではないかと個人的には考えていたところです。資料のアンケートにあるように、「先生のこと」というのはどういうことを指すのだろうと、理解が及ばず考えていましたが、石山室長の説明にもあったように、学力も含めてということで不登校児童生徒が増える原因になっているのかなと思いましたが、正直なところいまいちピンと来ておりません。

また、不登校の要因として「無気力・不安」が占める割合が多いとのことですが、それは、我々大人もそうですがコロナ禍を経験したときに、これからの社会や経済はどうなるのだろうという不安はありました。家庭内でも実際そういった会話が多く、傍で聞いていた子どもが不安を感じて落ち込みやすい性格になり、不登校になってしまったのかなと推察しているところです。

あくまで私のイメージですけれども、少し前まで不登校というとキレる子とか、不登校であることを誰かのせいにする我儘な子というイメージでしたが、そこから不安を感じやすい子が不登校になっているというように思えます。学校に行かなくても良い、と不登校を肯定する保護者も増えてきており、メディアの情報拡散も影響しているのではと思います。

また、コロナ禍の学級閉鎖や外出禁止を経験したことも多々あり、その間に学習の遅れが発生し、例えば塾に行くことができる子とそうでない子の差ができたり、部活もなく友達とも会えず家にいる時間が多くなりました。家にいる間何をしているかということ、今の子どもたちはやはりスマートフォンを操作するかゲームをするかだと思います。私の子どももそうですが、1日平均して7時間程インターネットやスマートフォン等を使い、睡眠時間が削れ生活リズムが崩れてしまうと。このように生活リズムが崩れることも、不登校の原因になっていると思います。

しかし、全国的な不登校の原因を見ると、前述のような理由よりもっと悲惨だと感じます。例

えば、ト一横キッズですとか、大阪ではグリ下に集まる子どもたちがいます。居場所がないという理由で、不登校というよりも非行に走ってしまうような社会にもなっているということで、社会全体で取り組みを考えなければならぬと思います。

フリースクールの子についてはわからないのですが、寒河江市の取り組みとしては、寒陵スクールが存在しているということで、大変ありがたく思っています。ただ、寒陵スクールに行かなくても、各学校でいろいろな先生方が児童生徒個々に向けた特別な部屋を作ったり、部屋を作れなくとも工夫してパーティションで区切ってスペースを作ったり等、対策をしてくださっています。その努力は我々教育委員が学校訪問を行う中で垣間見えました。以上です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございました。それでは、大沼賀世委員をお願いします。

○大沼賀世委員：

わかりやすい資料を揃えてくださり、ありがとうございました。不登校の児童生徒が増えているということは、マスコミ等でも取り上げられておりました。資料の中に、学校に行きづらくなってきたきっかけや理由等書いてありますけれども、理由がわかる子もいれば全く理由がわからない子もいるので、本当に状況は様々なのだと思います。このように、理由がわかっているものに関しては、解決できるものもあるかと思いますが、理由がわからず本人に任せるしかないケースもあるのかなど。先程鈴木淳一委員もおっしゃったように、学校に行かないことが怠けとか我儘という意見が昔はありましたが、今もそういうように言われることがあると思います。

あまり学校に行かない子やその保護者に対して、甘やかしているとか怠けているとかそういった声が子どもたちや保護者を苦しめていると思います。

学校に行けなくてもいろいろな選択肢があることを、子どもたちやその周辺の困っている人たちにきちんと情報が伝わるとういなと思います。先日、やまがた居場所マップというものがクローバーの会やまがたで出しているのですが、マップはあっても、それをもらえる場所というのは限られていると思いますので、悩んでいる人たちにマップの存在を周知していくことができたらと考えております。マップの中に書いてある親の会の言葉が、非常に私自身の支えになりまして、学校に行く行かないの連絡をすることもつらいとか、子ども自身は前日に「学校に行くから」と言うのですが次の日には行けなかつたりとか、学校に行つて欲しい親の気持ちを子どもが察して、その圧力から逃れるために「行く」と言っているとか、先程学校と不登校の子たちの認識のズレというのがありましたけれども、不登校に早期支援が必要とは言われておりますが、いろいろな事情を抱えた子どもたちが居やすい環境を学校が整えたりすることができれば、学校に足が向くようになるのかなど。ただ、学校に行くことのみを目的とするのは違ふと思います。

その点寒陵スクールは、リース作りや栽培、調理実習等季節に合わせた様々な活動が行われていて非常に素晴らしい教育をされているなと思います。子どもたち同士の交流も含めて、引きこもりにならずに外へ出ることができる居場所を作つていただいていることがありがたいです。以上です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございました。大沼尚史委員の方からもお願いします。

○大沼尚史委員：

まず、不登校問題に対する私の捉え方なのですが、石山室長が先程説明された資料の3ページになりますが、上段の一番下に令和4年度全国の中学生の17人に1人が不登校であると。寒河江市の令和4年度の中学生の状況を見てみると、私が見た限りでは18人に1人が不登校でした。そして、令和5年度では中学生1,048人中で87人が不登校で、なんと12人に1人という数字になります。資料の7ページ上段ですね、寒河江市の不登校児童生徒数としてカウントされるのは年間30日以上欠席している者とありますが、これに部分登校や別室登校等の児童生徒を含めると不登校傾向の子どもの数はさらに増えると。これをどう捉えるかですけれども、私は重大性を感じます。コロナ禍という話もありましたが、資料2ページの一番上のグラフで令和元年、2年あたりの数値が大きく跳ね上がっていると。しかし、その前の平成29年、30年あたりからも数値が上がっていつております。まして、子どもの数も少子化により減少しているのに、不登校率としてはかなりの上がり方をしていると思います。それを考えると、コロナ禍の影響を見守らなければならないとは思いますが、コロナ禍があったからという理由では済まされないかなということと、重大な課題であるということが私の意見です。

次に、この問題を考える上で認識する必要があるのは、先程鈴木多鶴子委員も話していましたが、不登校の子どもたちが5年後10年後どうなっているのか。文部科学省のホームページから、不登校児童生徒の追跡調査の情報を可能な限り見たのですが、私が見ることができたのは古い資料で平成18年度のものでした。そこでは、中学校3年生に不登校を経験した生徒の5年後を調査した結果が載っておりまして、8割を超える生徒が学校に通っているまたは働いているというアンケート結果でした。逆に、中学校3年生に不登校を経験した生徒のうちの2割弱が、進学も就労もしていないということが言えると思います。まして、アンケート調査に答えてすらいらない生徒はどうなのだろうと。一般的には、アンケート調査に答えているという生徒の方がまだ、情報に近いところにいるわけですので、答えていない生徒を含めるともっと悪い数字になるのかもしれないと思います。

実際に、不登校をバネに社会活動がきちんとできる子がどれくらいいるのか、そうでない子がいること自体が心配なことではありますが、一人一人の人生にどういう影響を与えているのか。わからないなりに理解を高めて、今後の対応を考えていく必要があると思います。

次に、着目したいと考えたのが、先程石山室長も話していたところではありますが、資料3ページの不登校児童生徒の約4割がどの機関ともつながっていないということです。資料には寒河江市のデータがなかったので、石山室長にお聞きしました。令和5年度の不登校児童生徒の人数ですが、小学生が37人、中学生は87人でした。この人数に対し、別室登校や寒陵スクール、養護教諭との関わり等機関とつながっていない人数は、小学生は0人だそうです。中学生は26人つながっていないそうですが、ただ、先生とはつながっているとのことでした。

資料3ページの全国のデータは令和4年度で、寒河江市のデータは令和5年度ですので1年の違いはありますけれども、比較すると全国約4割というところが、寒河江市では小学生だけを見ると0パーセント、中学生だけを見ると3割、小中合わせると2割といった数字にはなりません。中学生のところも頑張れないかなというところは一つ思います。



また、寒河江市の令和5年度の不登校児童生徒で、別室登校や寒陵スクールに行っているのは、フリースクールを含めて50人であると。自宅だけで過ごしている方が、123人のうち先程の50人を引いて73人になります。別室登校や寒陵スクールに行けている子たちというのが、学校に行く方向に向かっていてる子だと思いますので、支援もしておりますし情報も届けやすいと思います。ただ、自宅だけで過ごしている73人の方に対する支援の仕方や見守り方が、より大きな課題ではないかと私は思います。もちろん先生方は対応されているとは思いますが、先生方の意見を聞きながら、どのように対応していくかというところが、課題となり得るのではないかと考えたところです。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございました。それでは、鈴木多鶴子委員の方からお願いします。

○鈴木多鶴子委員：

私は、主任児童委員としても任がありますので、主任児童委員として年に3、4回程担当学区の小学校中学校の訪問をして情報交換をしております。この数年、不登校の子や学校に少し顔を出してすぐ帰ってしまう子、別室登校の子が特に増えたと感じておりました。

それで、本日の配布資料を見たときに、私の感じたことの通りだと思ったのですが、最近小学校低学年から学校に行けない子も増えてきて、非常に驚いているところです。なぜこんなにも増えてきているのか、家庭のあり方なのか学校教育のあり方なのか、多様な価値観がある情報社会の中で何かがあるのだろうと思いますが、以上のこと全てが影響しているのかなと考えています。

今そういう状況の中で、学校教育や地域教育というのはどのように変わっていかねばならないのか、ということはずっと考えてきました。20年以上も前の話にはなりますが、私の経験で、教育補助員として小学校に勤務したことがあります。そのときに、教室の中に担任の先生と一緒にチームティーチングのような感じで勤務したのですが、その中で特に印象的なお子さんが2人おりました。一斉授業の中で、その子は担任の先生に様々なシグナルを出していたのですが、担任の先生は大勢の人数の中で授業をしているので、その子のシグナルをなかなかキャッチすることができず、そうしているうちにその子は集団での授業をやっていけなくなっていました。私が入ることによって、その子にも1対1で関わるできるようになって、少しずつ心を開き変わっていったということがありまして、とても印象に残っています。担任の先生との相性もあるとは思いますが、その子の思いはなかなか担任の先生に伝わっておらず、良いことも悪く捉えられたり、「なんでそんなことやっているんだ」という先生の捉え方に、私も心傷ついたので、やはり一斉授業の危うさと一人一人の生徒を見るということの難しさがあるのだなと感じたのが一人目でした。

もう一人は、1年生の男の子だったのですが、1年生の途中で両親が離婚し何をするにも無気力になってしまいました。こんなにも家庭状況で子どもは変わるのかと思いました。一斉授業の中では、その子への対応は難しいのですが、やはり教育補助員が入ることによって授業の場面で1対1の対応をしたり、その子を全面的に見ているわけですのでその子と教育補助員の間に信頼関係ができたりということがあるわけで、1年生ということもあり、すぐに気力は戻り笑顔で接

してくれるようになりました。逆に言うと、家庭の状況でこんなにも学校生活に影響が出るのだと思知らされました。

今、主任児童委員として小学校の方に行っておりますが、そこで最近気になることは、子どもが学校に来たり来なかったりするの、お母さんの精神疾患によって子どもの気分も浮き沈みするというケースが何件かありました。福祉的な家庭の支援も必要ですけれども、学校現場でもその子に対して1対1で関わる人材も必要だと思っているところです。寒河江市では、学習支援員の方に何人か入ってくださっていますし、ふれあいサポーター制度で学校の先生が別室担当の先生としていてくださるところもあります。学校においても、このように別室担当ということで一人一人の対応を頑張っているところがあるのですが、それでも家庭の状況で子どもが遠慮して接しきれていない部分もありますので、先生がもっと関わる必要のあるお子さんもいます。

それから、寒河江市のお母さんではないのですが、隣県の知り合いのお母さんで、学校には行かせないという選択をしている方もいます。なぜかというと、今までの学校は一斉授業で一律の対応であり、こうしなければいけないという方針で、自分の子どもの良いところが潰されてしまうのではないかと考えたからだそうです。自分の子どもが持つ感性や想像力は、学校に行かない方が伸びるのではないかと考えたそうです。

その方はお子さんが3人いるのですが、3人とも学校に行かせない選択をしています。今いろいろなところでいろいろな人たちと関わる中で、実に様々な性格や捉え方、行動パターンの方がいるのだと日々私は学ばせてもらっております。

やはり、子どもたちもそれぞれの性格や受け止め方、行動パターンがあるだろうと思います。先程の、学校に行かせないお母さんの事例のように、いろいろな子どもたちがいる中で、自分の子どもの良いところや可能性を潰すのではなく伸ばしていく教育、という今後のあり方になってしまい議題がズレてしまうかもしれませんが、そのようなことも考えているところです。その子に合った学びの仕方が必要になってくると思いますし、子どもの理解とでもいいますか、大人もそうですけれどもその子の持っている癖とか特性をもう少し学んで関わるとか、特に大変なお子さん等に対して先生方も「子どもの特性はどうなのだろう」と学ぶ姿勢が今からの教育に必要だと思います。

そして、子どもと先生との相性ですね、今大学では教育の研究分野としてあるようですので、そういったものも考えていく必要といたしますか、困ったときに考えていく必要があると思います。

先日、寒陵スクールに見学に行かせていただきました。これまでも何度か顔を出してはいたのですが、最近の寒陵スクールはとても明るく楽しく、過ごしやすい状況になっているなど思っております。先日行ったときは、夏休みの学校がほとんどで、夏休みが終わった学校の生徒さんがいて少人数だったのですが、今日何を勉強するか等は生徒本人が決めて時間割を作成している様子でした。

また、野菜を寒陵スクールで育てているのですが、料理の得意な子がその野菜を使って調理をしたということで、自主性を重んじていろいろな取り組みをしてきているなど感心しました。子どもの人数も多いようですし、寒陵スクールの先生方も増え充実しているのではないかなと思います。

他には、サポートハウスかぼちゃさんが運営しているのですが、居場所としてのフリースペー

スすいかでの話を聞いたり、親の会たんぽぽというものがありまして、私の子どもの同級生の保護者たちが始めたものが今も続いておりました。そういった居場所やつながりも大事だと思っております。先日寒陵スクールに行ったとき、寒陵スクールの卒業生である高校生も来ていました。卒業した後も帰って来ることができる場所があることは、素敵だなと思いました。以上です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございます。佐藤教育長の方から、教育委員の皆さんのご質問への回答等含めてお話いただければと思います。

○佐藤志津男教育長：

いろいろな面からのご意見、ありがとうございます。皆さんから共通して話題に挙がっているのは、不登校の児童生徒数が本当に多いということだと思います。これはその通りのことでして、昨年度における寒河江市の中学生の不登校生徒は、全国と比較しても多いのではないかと思います。小学校も増えてきました。実は、昨年度の状況を見ていて、特に中学生ですけれども増え方が激しい印象です。今年度については、昨年度のうちから準備を進めまして、中学校に不登校別室対応の教育相談員の方々を1名ずつ配置するという対応もしてきたところです。

先程教育委員の皆さんからもお話ありました通り、各学校でも不登校対策はしてきておりますが、児童生徒一人一人で状況は異なりまして、別室があっても他の人がいると行きにくい子や、逆に他の人がいて話すことができた方が行きやすいとか本当に様々で、なかなか対応が難しいところです。最初に鈴木淳一委員から、アンケート調査において「先生のこと」が原因でという話がありました。鈴木多鶴子委員からも、自身の経験の中で、受け持った子どもが担任の先生から「なんでそんなことやっているの」と言われ、先生が誤解しているのではという話がありましたけれども、実は山形県内の不登校児童生徒約100人の保護者の方の調査で、先生との関わりが不登校の要因であるという回答割合はかなり多いです。そのことを先生に相談しても、保護者が望んでいる回答とズレていることがあるのではと思います。

そのズレはなぜ生まれるかという、やはり先生がその子の様子をしっかりと把握していないことにあると思います。先程の鈴木多鶴子委員の言葉で言うと、認めていないということがあるのではと思います。後は、先生からすると励ますつもりで言ったことや軽い冗談が、その子にとっては嫌なことだったとか。そうしたいろいろなズレ、教員側は気づかないけれども子ども側はマイナスに受け取ってしまうという状況があるということで、前述のようなアンケート結果になるのかもしれない。ですので、資料の3番のところにもつながりますけれども、そういうことなんだという意識を持って、教員が対応していかなければならないと考えています。

大沼賀世委員からは、不登校に関するいろいろな情報をもっとあれば良いということがありました。そうした中でいろいろな場で保護者がつながることができれば、安心できるという話がありました。本当にその通りだと思いますし、我々教育委員会としては、寒陵スクールのことも各学校に引き続き周知をしていく必要があります。

私は、校長会のときに、校長先生方に「少しでもよいですので、ぜひ寒陵スクールに来てください。子どもたちの様子を見て一緒に遊んでください」とお話しています。去年あたりから大分校長先生方も来てくださるようになりまして、担任の先生方も顔を見せてくださるようになり

ました。

そして、寒陵スクールの担当である先生の日誌を見ると、校長先生や担任の先生が来ることを子どもたちはとても喜んでおります。寒陵スクールは不登校児童生徒にとって有効だという話がありましたけれども、このような子どもたちの様子も含めて情報をもっと発信していくことで、子どもたちや保護者の安心感につながるのかなと考えます。

先ほど、鈴木多鶴子委員からもお話があった、学習支援員が対応に入ると子どもが変わったということですが、自分のことを見てくれる大人がいるということで、子どもたちが安心感を持ったということだと思います。

そうしたことは、基本は担任の先生が行うことだと思いますが、その他の先生方もそうした目で子どもたちを常に見ていくということが大事だと思います。やはり先生と子どもの相性もありますので、今、小学校高学年を中心に教科担任制等も導入してもらおうよう教育委員会として働きかけています。いろいろな先生と関わることによるメリットも大きいと思います。今、教育委員の皆さんの話を聞いて、改めて強く感じたところです。以上です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございます。資料の中の、フリースペースすいかや親の会たんぼぽですか、先ほど、鈴木多鶴子委員も話しておりましたが、私も去年にですが、福島県の喜多方市にある児童遊戯施設の見学に行ったときに、建物の一角にNPO法人が運営する不登校児童生徒の受け入れ施設がありました。

喜多方市は寒河江市と同じ4万人程の人口で、そういった施設が1、2か所あって子どもたちに身近で、行くことに対するハードルが低いようでした。もちろん、本市の寒陵スクールも良いのですが、寒陵スクールではなくても、子どもたちに身近な受け入れ施設があれば良いのではないかと感じました。

大人になれば、例えば嫌な会社であれば辞めるといった選択ができますが、小学校や中学校では現実的に辞めることはできないようになっておりますよね。なぜ子どもたちの進む道が一本道のレールしかないのかということ考えたときに、成長する過程の中でいろいろな選択肢があるという環境を大人が準備していくという意味では、もう少し環境を整える必要があると思います。

寒河江市の方でも、多くの皆さんの努力でいろいろな取り組みをしていると認識しておりますが、この課題については、まだまだこれからといったところです。今後もいろいろな取り組みを試行錯誤しながら、続けていくことになると思いますので、本会議後半では、これからの課題解決についてどういう風に考えているかについて、意見を聞かせていただきます。それでは、鈴木淳一委員の方から、よろしく願いいたします。

○鈴木淳一委員：

不登校のこれからということで、どう解決していくかですけれども、この間寒河江市制施行70周年記念事業である、さがえ未来トークの中で、中学生から「サードプレイス」という言葉が出てきました。よくその言葉を知っているなど感心しました。所謂、居場所という意味ですが、今の子どもたちがどんな居場所を求めているのかということも少し考え直さないといけない時代なのかなと思っています。

まず、保護的な場所も必要だと思いますが、前述の中学生が言っているのはおそらく楽しい場所を求めているのではないかと感じました。さがえ未来トークにあたって、私たち教育委員が学校を回ったときに、ある小学生5・6年生が寒河江の良いところと悪いところについて議論し考えていたのですが、「とにかくイオンモールが欲しい」と話していて、商店街の立場としてとても申し訳なく思っております。

しかし、子どもたちにまず提供しなければならないのは、一番簡単なところでいうとスポーツだと思います。寒河江市は全てのスポーツができる環境ですので、とても自慢できると私は考えております。例を挙げると、カヌーやスケートボードとか、この間は駅前にバスケットボールのコートもできました。体操をするところもありますし、ボルダリング施設も最近できましたし、そういったスポーツを通して賑わいも生まれるのではないかなと思います。

それから、ぜひお願いしたいのは、全ての中学校で神輿の祭典に参加していただきたいということです。参加する生徒は少ない人数ではありますが、良い取り組みだと思いますので継続していただければと思います。

先ほども話にあった、子どもたちが求める楽しい場所ということですが、教育委員として長年学校を回っていて、なぜ中部小学校がこれだけ人気があるのかなと思い、新しく中部小学校に来た保護者たちに話を聞くと、「楽しそうだから通わせたい」と言っておりました。私自身この理由になかなか辿り着けないのですが、この謎を解明すると明るい学校を目指すことにつながるのかなと思ったところです。

しかしながら、不登校問題の解決は大変難しい議題であります。学校側でもいろいろと対応してくださっていることと思います。例えば、陵南中学校では、制服をワイシャツからポロシャツに変えたり、髪型に関する校則を緩和したりヘルメットのデザインを刷新したりですね、そういったことも子どもたちには良いことなのではと思います。陵南中学校だけでなく市内の全ての中学校に広がっていったら良いのではと感じました。問題の解決にあたっては、その子の家庭事情は出てくると思います。調査してみると、親の愛情不足だったとか。そこで私が考えるのは、日本人ではなかなかやらないと思うのですが、ハグや嬉しいときのハイタッチなどをどうにか取り入れることができる社会にならないかなと思っています。

子どもが小さいときには、若いお父さんでもハグをしたこともあるかと思うのですが、やはり思春期になると抵抗があってしなくなる傾向にありますので、そういった親子の間の身体的な接触行為が意外と効果的ではないかと思っています。

また、心を強くするためには、礼儀や綺麗な言葉遣い、善悪の区別を教えることが良いと考えます。心とは別の、精神の強さという点では、ランプの炎をじっと見つめるとか焚火を間近で見ると熱さを感じるとか、富士山を飛行機の上から見下ろすとか、ライブハウスで今までにないくらい大声を出すとか。スポーツで言うと、ホームランを打つ瞬間を生で見るとかです。そういったことを経験させると精神が強くなるのではないかと言う方もおりますので、紹介させていただきました。解決となると難しいですが、まずは、生きて欲しいと切に願います。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございます。それでは、大沼賀世委員をお願いします。

○大沼賀世委員：

不登校の児童生徒が減るには、まず学校が楽しい場所であることが何よりではないかと思えます。1月にNHKスペシャルで不登校の特集が放送されました。山形新聞で取り上げられた内容でもありますが、その番組の中で天童市の中部小学校が出ておりました。そこでは、子ども自身が学び方を考える授業にするには、ということでしたが、その中に「フリースタイルプロジェクト」がありました。大好きな漫画をたくさん描いている子がいたり、お化粧品に励む女の子たちがいたり、中には「透明感を出すにはどうしたら良いか」といった大人顔負けの研究をしている子もいました。どの子も楽しそうに友達と学んでいる様子が映っておりました。

どうしても学力にすぐつながってしまいがちですが、好きなことを学ぶことができれば大人子ども関係なく当然楽しいですし、そのことで周りの人から褒められたりしたときには、学校に行くモチベーションがさらに高まるのではないかと思います。もちろん、学力も大事なことです。

ですので、学校の授業の仕方も変えていくのも良いのかなと思います。来年度、上山市で多様化学校、不登校認定校と言いますか、そういった小中一貫校ができると聞いております。宮城県に何校かある多様化学校のホームページや資料を見たのですが、そういったところでは実践型授業とか、ゲストティーチャーを招いて様々な講義や体験をすることができるということで、上山市の学校もこれから楽しみだなと思いました。

今後、いろいろな学校を選べるようになれば、子どもにとって学びの場も広がり、自分自身で通う学校を選んだりやりたいことを見つけたりすることができれば、不登校の子たちも減るのではと考えます。以上です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございます。大沼尚史委員、お願いします。

○大沼尚史委員：

今、文部科学省が提唱する「COCOLOプラン」というものをベースにして、教育関係に携わる人たちがいろいろと取り組みを行っていると思いますが、このプランは子どもが学校に戻って来られるようにすることや、不登校のない学校づくりを目指すものだと考えます。

これが、アメリカだと少し文化が違うようです。アメリカでも不登校児童生徒は増加していて、200万人以上だそうですが、対処法として「合わないのであれば、無理に環境に合わせるのではなく、自分に合った環境で力を伸ばしていこう」という発想が根底にあるということです。この記事は、一般社団法人不登校支援センターというホームページで見つけたので信憑性は不明ですが、不登校から大学進学し就職するような、つまり、学校に無理に戻ろうとしたのではなく、取り得る方法を探したと。文部科学省の方でも、資料を見る限りこういった方向性も加味しているように感じましたが、ある意味義務教育の否定でもありますので提案することには私は懸念があります。ただ、こういう事例を不登校になった子どもや保護者に伝えていくことも、ケースによっては必要だと思います。

次に、別室登校と寒陵スクールについてです。先日、寒河江小学校と中部小学校の学校訪問をしたときに、どちらの学校でも別室登校に使用する部屋のスペースの確保に苦労していて、中部

小学校では、男性教員の更衣室を隅に寄せてスペースを確保しておりました。

ですので、現在、不登校児童生徒が多いのはコロナ禍のピークを経験したことが一因として考えられるかなと思うので、そこも踏まえてのこととなりますが、どうしても本当に現場が必要であれば、やはり一時的にプレハブの教室を作っても、不登校児童生徒用が別室登校をできるようなことをしていくべきではないかと思います。

寒陵スクールにおいては、皆さんおっしゃっている通り、寒河江市の一つの核となる拠点だと思えます。別室登校にも言えることですが、寒陵スクールは人も設備も含めてぜひとも強化していくべきだと思えます。

次に、先生方の負担増大という点について、増大というのはあくまで私の印象ですが、不登校児童生徒の増加があって、それには一人一人継続的な対応が必要だと思えます。その上、先生たちには前述の「COCOLOプラン」に係る生徒指導の転換であったり、多くのことが求められているわけで、既に疲弊している先生もいるのではないかと個人的に懸念しております。先生方の負担を減らし、先生方が前向きになれるようにするために、必要な支援員の増員をしっかりと行っていくべきだと思えます。

一番初めに「不登校は重大な課題という認識だ」と申し上げました。この課題に向き合っていくにあたって、例えば不登校対策推進室とかですね、教育委員会内に新たな組織を作って、不登校問題を大きく取り込むことはできないかなど、何をすることができるかという点が大事で、そこがまだ見えていないので発言をためらったかたがあるのですが、やはり不登校の子を減らすということが一番の目的だと思っております。

例えば、不登校の原因が先生のことであれば、その子の対応を学校から切り離して、不登校対策推進室（仮称）がやるとか、先生とのことが原因であれば、距離をとるべきだと思えます。そうすることで、先生の負担も減らすことができますし、子どもや保護者にとっても、受け入れやすくて状況が良くなるかもしれないと思えます。

先ほど、私は、「別室登校や寒陵スクールに来ることができない子について考えるべきだ」と話しましたが、例えば、そのような子どもにですね、不登校を経験して乗り越えた立場の方の資料を作って定期的に発信するような組織を作る必要があると思えます。

何のために作るかという、担任の先生がその子に接触する機会や理由を作るということも思ったのですが、不登校対策推進室（仮称）で何ができるかという考えに至りました。基本的には、子どもは担任の先生とつながりを持つということが大切だと思えますので、切り離して良いものだと私は思いませんが、前述のように不登校が大きな問題だということと、先生の負担が心配であること、切り離すことで子どもや保護者の状況が好転することが見込まれるのであれば、組織的な対策もあり得るのではないかなど考えます。

もちろん、一度組織を作ると、それをなくすことは大変ですが、寒河江市では5年後に中学校統合を控えておりますので、統合後の中学校にその役割を移すことも一案かなと思いました。

以上のことをまとめまして、前半からの話でもあるのですが5つお話ししたいと思います。一つ目が、自宅で過ごしている子どもたちに対する支援や見守り方の検討。二つ目が、子どもたちの支援方法について、学校に戻ろうとせずに自分に合った環境を目指すという選択肢を先生方に持たせるということ。三つ目が、別室登校と寒陵スクールの人材設備を含めた必要なものの投入。四つ目が、組織も含めて先生方の負担軽減。五つ目が、この不登校問題について、寒河江市の全

P T Aが情報を共有することです。全国の状態も含めて知らない方も多いかと思しますので、情報を共有していくことが、より良い学校作りや家庭教育の推進向上、不登校の未然防止や早期発見、不登校児童生徒への同級生からの支援を得られる可能性、そして先生方の負担軽減につながるのではないかと思います。以上が私の意見です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございます。それでは、鈴木多鶴子委員をお願いします。

○鈴木多鶴子委員：

私はまず、学校の先生と保護者そして地域社会の意識改革が必要だと思っております。学校行動プランが策定される平成5年の前の話にはなりますが、主任児童委員として担当の中学校において情報交換をする中で、学校の先生が家庭訪問で保護者には会えても、不登校の子どもには会うことができないというケースが数件ありました。「1年も会えていないと、存在確認もしなければいけないので、何とかしなければ」という先生の言葉が記憶に残っています。

そのような状況になる前に、寒陵スクールとかですね、何かの支援につながるようにならないかなと思っております。その都度「寒陵スクールにはお知らせしたのですか」と聞くと、学校側では、まず学校に来ることが大前提と言いますか、学校の先生から学校ではない場所を提供することは言づらいといった話がありました。

意識改革が必要だと考えた理由は、まず保護者として、自分の子がずっと家に引きこもっているよりも、前述のような相談できる場所や気軽に行くことができる場所を教えてもらった方がよいのではないかと思ったからです。学校に行っていない子やその保護者を知っている場合は、学校から言わないのであれば主任児童委員から寒陵スクールに行くことを勧めたり、寒陵スクールにも行けない子に対しては家庭訪問をして、主任児童委員が相談を受けたりですね、私の知り合いは、訪問事業に2件程携わりまして、一人の子は中学校には行けなかったのですが高校からは通学し、今は社会人として毎日仕事をしております。もう一人の子は訪問後に寒陵スクールに行くようになり、高校に通学しました。面識のある保護者には話ができたのですが、面識のない保護者には私の方から寒陵スクールを勧めることはできなかったのもっと学校の方からも情報を提供して、気軽に行って良いんだという意識改革をして欲しいと思いました。

令和5年に「C O C O L Oプラン」というものができましたので、今年から状況が変わっていることを期待しているのですが、大沼尚史委員からもお話あったように、不登校児童生徒の約4割がどの機関ともつながっていないということは、保護者も子どもも苦しいことだと思います。閉じこもっている児童生徒をなくすということが最初の目標になると思いますし、保護者が家において閉じこもっている子もいれば保護者が働きに出ていて一人で閉じこもっている子もいるので、そういったことも何とかしたいなと思います。

そのためには、学校が全てではないとか、子どもが不登校であるのは保護者にとって恥ずかしいことではなく、たまたま学校が合わなかっただけであっていろいろな学びの場があるという時代や社会になって欲しいなと思います。そういったときに、スクールカウンセラーは既におりますけれども、スクールソーシャルワーカーや社会福祉士、精神保健福祉士等資格を持つ方、様々な児童生徒の状況に着目する方、不登校問題を解決するための関係機関との連携ができるコーデ



イネーター的な存在ということで、先生や保護者のわからないところにもっと踏み入ってもらって良いのかなと思います。

以前、寒河江市にもスクールソーシャルワーカーを導入して欲しいと要望したことがあり、一時的に県の方から入ってもらったことはあったようです。今は県の方で何名かいるとのことですが、私が主任児童委員として担当する学校では「スクールソーシャルワーカーの方に関わってこのようになった」という話を聞いたことがないので、もう少しスクールソーシャルワーカーの方の力を借りて、いろいろなところにつながりを持てたらと思います。

それから、教育支援センターとしての寒陵スクールとして、今後取り組んでいくと石山室長からもお話ありましたが、本当にその通りだと感じました。学校に行くことができない子が勉強する場だけでなく、気軽に相談できて、大沼尚史委員の言葉を借りるのであれば不登校対策推進室（仮称）のキーマンになる方がいて、その方がスクールソーシャルワーカー的な役割をしているいろいろな機関につなぐとか。寒陵スクールは勉強する場だけではなくて、いろいろな機関を紹介してつないでいく場といった教育支援センターとなっていくことも、広がりがあるのかなと思いました。

とにかく、寒陵スクールがですね、児童生徒の気軽に相談できる場になって欲しいなと思いましたし、居場所の拡充ということで、先程佐藤市長の方からもお話ありましたが、山形市の「やまがた居場所マップ」フリースペース等の居場所の欄2番に、生きる力を育むみんなの居場所ここくるというものがありました。

これは、児童遊戯施設シェルターインクルーシブプレイスコパルの中にあるそうです。昨日か一昨日の山形新聞に掲載されておりまして、記事の中で「イベントでわたあめを販売し、その収益金を山形新聞に寄付した」と書いてありました。施設名も良いのですが、こういった寄付活動をすることで、居場所自体のPRになるのだなと思いました。イベントをやることで、子どもたちがその場所に行くハードルが下がるのかなと思います。市のPRだけでなく、居場所の中からもPRしていくことも必要になってくると思いました。

寒陵スクールの方でそういったところまで手を広げることができるのかはわかりませんが、誰でも来ることができ明るい場所ということをもう少しPRしていくことも良いのかなと思いますし、寒河江市で他にどんなところが居場所になるのかということを考えてときに、やはり同じ児童遊戯施設であるクラッピンサガエの一角に英語のコーナーとかもありますので、そこで誰でも英語を学ぶことができる居場所とか、子どもたちが来てハンドメイドの何かを作ったりする楽しいイベントとか、クラッピンサガエで役に立つものを子どもたちに考えてもらおうとか、そういった仕掛けをして居場所を作っていけたらと思います。

居場所の名前も魅力的なものにして、子どもたちの興味関心を引くものになればと。市立図書館も指定管理者になり新たな出発をしておりますので、司書の方の力も借りて読書好きな子たちの先につながるような、もっと読書が広がるような居場所ができるのではと思いました。また、小中学校の方でもですね、以前は読書活動推進員だった方々が、今は教育活動支援員としております。そういったノウハウを持った方がいる学校は、解決できるのではないかなと思ったところです。

企業さんでは、最近ボルダリング施設もできましたので、ボルダリングの魅力を解説するとかそこで働く障がい者の方と子どもたちが交流するとか、生きる上でのいろいろな気づきがあった

り活動の幅が広がったりするのではと思います。学校が全てではないということで一番思い浮かぶのは、黒柳徹子さんの話でして、公立の学校に行ってからそこを辞めてトットちゃんの学校に行くことがなければ、これまでの黒柳徹子さんはないのだろうと思っています。

良いところを伸ばす教育や子どもたちに寄り添ってとことん話を聞いてくれる先生といった、一斉授業の学校だけにこだわらない場所で、本来の良さが伸びて活躍できる子が増えたら素晴らしいなと想像しているところです。

先ほど、子どもたちの居場所という点についてお話しましたが、追加説明になります。発明クラブという魅力的なものも寒河江市ではやっておりますので、そういったところでも不登校児童生徒への配慮ができるのかなと思いました。どのことにも当てはまるのですが、ほっとする場や誰もが疎外感を感じない配慮をしてくれる場、明るく楽しい場や憩いの場、居心地の良い場、さらには一体感を感じることでできる場であれば、子どもも大人も集まるのかなと。このような場であれば、学校でも他の居場所でも子どもも保護者も生き生きと過ごせると思いますので、ご対応の程よろしくをお願いします。以上です。

○佐藤洋樹市長：

ありがとうございました。それでは、佐藤教育長の方からお話をお願いします。

○佐藤志津男教育長：

多方面からのご意見、ありがとうございます。本当にその通りだと思いました。今、教育委員の方々からお話あったことを絡めながら、私の考えも話したいと思います。やはり、子どもたち一人一人が自己肯定感や自己存在感を持つことができなかつたり低下したりすると、どうしても学校に足が向かなくなります。ちょっとしたことで挫けてしまったりすることがあると思います。

ですので、学校や地域の中でも自己肯定感や自己存在感を育むような活動ができるということが、大事だと考えます。先ほど、鈴木淳一委員からも神輿の祭典への参加についてお話ありましたが、子どもたちにとって自己肯定感等を育むときに有用なものは何かというと、家族や学校の教職員以外の大人から褒められることや認められる体験なんだと思います。そういった意味では、ボランティア活動も含まれると思うのですが、そうした体験ができるような場を学校や地域の中でも作っていくということがとても大事です。スポーツでもですね、自分がやりたいことという点で、自分の存在感にもつながるといこともあると思います。ですから、スポーツが好きな子はスポーツの道に進むということも大事な事かなと思います。

また、大沼賀世委員からは、学校の授業の仕方も変わらなければならないのではないかという話がありましたが、本当にその通りだと思っています。黒板に書かれたことを生徒がノートに書き写すというかつての一斉授業から、大分今は授業の仕方は変わってきたとは思いますが、先程天童中部小学校の紹介もありましたけれども、他の学校でも例えば自由進度学習ということで、単元の中で生徒自身が進み方を考え学ぶということも取り入れております。

それがなぜ大事かということ、自分で選択できるからだだと思います。つまり、学校で「こうなさい」とばかり言われていては、楽しくないと思います。楽しい学校ということを考えてときに、自分で決めてやれるということは楽しさに結び付きます。ですので、授業の中でも自分で選択できるという場を広げていくということがとても大事だと考えます。

今、授業の中では、いわゆる個別最適な学びということで、一人一人に合った学びをすることが重要であると言われておりますけれども、それが単なる題目ではなく、実際に授業の中でそういったことが行われるようにしなければならないと思います。それをもう少し広げて不登校とのことに絡めて言えば、自分の進路を自分で選んでも良いんだということだと考えます。先程から何人かの教育委員からも話ありましたが、学校だけが全てではないということは、一つ大事なことだと思います。

そうしたことから、自分の将来を考えたときに、今こうしたいと思うことをやることも大切です。そのときに、佐藤市長からもお話があったように、例えば学校以外の場所で自分の居場所と言いますか、自分で選択できる場所を整えていくということも大事だと思います。今、寒河江市には寒陵スクールがありますが、あるから大丈夫ということではなくて、他のことも考えていく必要があるのだろうなと思います。

大沼尚史委員からは、先生方の負担軽減についてのお話がありましたけれども、私も先生方は疲れているのではと思います。大分時間外勤務は減ってはいるのですが、いろいろなことで疲れているのは確かかなと思いますし、疲れていると子どものサインが見えなくなりますし、忙しいと「気になるな」と思っても声をかけたりすることが少し後回しになってしまいます。私自身も、担任をしていたときに経験しました。

そういった意味で、先生方の負担を減らして子どもをきちんと見取って、不登校のサインを出している子への対応ができるようにすることは大事だと思います。不登校対策推進室といった組織を作ることは、すぐにできるわけではありませんが、今日のニュースで、自治体に不登校対応の人員を配置するというので、来年度全国の20の自治体で試験的に行うようです。寒河江市の方でも指導推進室を中心に不登校対応について一生懸命頑張っているところですので、今後とも努力はしっかりと続けていきたいと思います。

鈴木多鶴子委員からは、意識改革が必要であるとお話がありましたけれども、本当にその通りだと思います。今日の資料13ページ下段に、学校の意識の転換ということで石山室長から説明ありましたが、こういったことを去年一昨年から、校長会等で校長先生方にお話はしております。ただ、校長先生方はある程度理解されていると思いますが、担任の先生からすると、担任としての責任感や使命感と言いますか、不登校になったのであれば何とか教室に復帰させることを第一としているところがあります。それは当然あることだと思いますが、それだけではなくて、今この子はこういう状態だからもう少し別の選択肢も一緒に考えてみようというような、心の余裕がないとなかなかうまくいかないのかなと思います。去年国で策定した第4次教育振興計画のコンセプトの一つが、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」となっております。

今検討されている第7次山形県教育振興計画でも、「ウェルビーイングを目指し、多様性あふれる持続可能な社会の実現を担う山形の人づくり」を目標としています。「県民みんなでチャレンジ！」ということで、学校だけで子どもを育てるのではなく、地域や家庭と一緒に子どもを育てよう。県の計画の中の「ウェルビーイングを目指す」というのは、将来にわたる持続的な幸福感、個人だけでなく地域全体も良いなと思うような幸福感がある状態のことです。

そういったことを学校でも意識すると、見方も広がりますし、もう少し肩の力を抜いて対応していけるとと思います。学校だけで不登校問題を引き受けることは無理だと思いますので、いろいろな機関と協力して皆で関わっていくことが大切です。対応する側が気持ちを楽に接すれば、子

どもたちにとっても保護者にとっても良いものになっていくのかなと思ったところです。今日は本当にいろいろな面からご指摘をいただきまして、ありがとうございました。

○佐藤洋樹市長：

皆さんから一通りご意見を頂戴しました。総じて言うと、楽しい学校づくりを目指していくという話が多かったのではと思います。

先ほど、鈴木多鶴子委員から、一体感というお話ありましたが、やはり仲間があつての一体感だと思いますので、その辺りを醸成して子どもたちを育てていけたらと考えます。

なかなか難しいとは思いますが、佐藤教育長の方からもありましたように、学校だけでなく地域やその他の関係機関等とも連携して、この不登校問題について解決していくということも必要かなと。大沼尚史委員の話にもありましたけれども、組織的な対応は大変大事なことだと思いますし、資料16ページ上段にも教員のゆとりの創造ということが書いてありますよね。先生方が大変疲弊しているというお話でしたが、(3)の2番に急激な若返り、つまり先生の経験不足だと言っているのですかね、なかなか対応がうまくできていないと。教員不足ということも関係しておりますけれども、その辺りは全体的な教職員体制の充実の中で取り組んでいかないといけないのかなと。不登校対策を担うセクションとか、教員一人一人の数や配置についても充実していく必要があるのかなと思ったところです。

今日の議題は大変難しい課題の一つであり、皆さんもいろいろと苦労されてこの場に出ているわけですので、我々としても、子どもたち一人一人が自分の進む道について多様な取り組みができるような環境を皆さんと共に作っていただければと思います。会議の中で出たものでも相当多様な取り組み方や対策が提起されておりますので、それについて我々も真摯に受けとめながら、一つ一つ取り組みを進めていければ良いのかなと。ぜひ寒河江の子どもたち一人一人が楽しい学校を目指していけるように、我々も努力したいと思います。今日は本当にありがとうございます。皆さんの方から何かありますか。以上で総合教育会議の方を終了いたします。

4 その他

5 閉 会 午後4時53分